

もひかんといっしょ。

♡ハートフル世紀末ファンタジー風味♡

BARUNGA

四月二日

未来の私達へ、お元気ですか？

今日、私達の入籍を記念して初めて日記を付けようと思います。私達夫婦の日常と明るい未来のために、そして将来

「昔の私達はこんなことがあった」

「こんな生活を送ってたんだ」

というのを懐かしく振り返ることができる、そんな思いの出の記録を作っていくたい。そう考えた結果がこの日記です。

でも不思議なのは、何で結婚のときになってあんなに自警団の皆様や町中の知り合いが怖い顔してたんでしょう。確かに夫は奇抜な髪型や服装を纏っていて、

「これから始まるのさ、俺達の栄光の日々がなあく!! ヒヤッハツハツハツハハ！」

「この女は最早永遠に俺様の物だ、二度と手放す事なんざしねえから、精々安心して俺達の姿を後ろの影から眺めているといやがれえろ!!」

と大声で高笑いするかなりハイテンションな性格ですが、そ

れが夫のチャームポイントです。でも何故か結婚式だというのに皆険しい顔というか憎々しそうな視線を送っていたのでしようか、何かあったのかしら。

四月十五日

結婚からもう十日以上過ぎましたが、私達は何時も刺激的な愛を送っています。今日も夫が

「マゼンダアー！ 今日もしっかり獲物を狩ってきたぞお、心の底から泣き叫んで俺様に感謝するんだなあ！ ヒヤツハツハアア！」

何て言いながら、大物のオーグを狩ってきてくれました。オーグは身体が大きく力も強いので狩るのは大変らしいのですが、一度狩れば上手く捌く事でオーグ一匹につき、十数日分も食糧を得られます。オーグ狩り成功を祝って、今日の夕飯はオーグのステーキですと夫に伝えると、

「その程度の貢ぎ物を出された程度で、この俺様の機嫌が取れると思ってやがるのかあ？ ああん？」

と言いながら凄い剣幕で言い寄ってきました。

少し怖かったですですが、よく観察すると目からは喜びの感情が覗けます。言い方はちょっと荒っぽいところはありますが、何か照れ屋な雰囲気があるのも私の夫のチャームポイントです。ああもう可愛いなあ！

四月十八日

夫が大きなナイフと太い鎖を持って、今日も狩りに出かけます。手に持つてるナイフはとても太く、あまり見た事のないナイフで、夫曰くアーミーナイフと呼ばれる武器だそうです。今日も夫は

「俺様がこの地に恐怖を振り撒いてゆく姿を、しかとその目に焼き付けやがれ！」

と言って、何時もの狩りに出かけます。身体の弱い私にとつて、夫のあの全身が筋肉に覆われた逞しい姿を見ていると、少し羨ましいなと考えてしまいます。けどあのトゲが生えた肩当やトサカみたい縦に一直線に伸びた様な髪型、黒いサングラスは、どこで知ったんでしょうか……。

五月二十六日

家で夫の帰りを待っていると久しぶりに友人のジュリが顔を見せに来ました。だけど何故かジュリは顔を青ざめさせ、何かビクビクしてるような、何かに隠れるような表情で来るので心配して訪ねてみると、ビククリしたような顔で何度も何度も「大丈夫！ 大丈夫だから！」

としか言いません。明らかに何処かおかしいです。相談でも聞こうかと考え、そろそろ夫も帰ってくるし、三人で一緒に話

そう、きっと夫も親身になって話に乗ってきてくれると伝えると、急に顔面蒼白になり、用事が出来たと言って慌てて帰ってしまいました。久しぶりに会った友人と夫の三人で仲良くしたかったのに残念でなりません。

今日の夫の収穫はユニコーン十匹でした。全身返り血で真っ赤に染まった身体には所々血がにじむ等傷を負ってしまっているみたいですが、それでも夫はまだまだ戦い足りないのかピンピンとしていました。

ですが殆ど人と出会う事の無い、とても珍しい動物であるユニコーンをこんなに捕えるなんて流石夫です！ 夫曰く、「あんな目立つ角を付けてるなんざ、唯的的にしてくださいと言ってるようなもんだ！ あんな青臭え小娘にしか媚びねえ臆病者の馬如き、俺様が狩れない筈がねえのさ！ ヒャッハッハッハ！」

とのこと。オーグといいユニコーンといい珍しい獣を狩る夫はとてもかっこいいと思います。

でも確か、ユニコーンって一つの地域にたった十匹位しか住んでいない希少な動物だったような……。

六月二日

今日から夫が少し遠くのオーセイユ街に出かけに行きます。オーグやユニコーン等、夫が捕えて捌いた貴重な動物達の素材

を売りにいくそうです。夫も、

「なあに、俺様の手にかかれば大金を得るなんざ、お茶の子さいさいよ。盛大に売り払ってやるさ、特にユニコーンの剥製や毛皮は高く売れるぜえ〜」

と威勢のいい、とても元氣な返事をくれました。こうして私
が書いてる文字からも夫の元氣な姿が分かってしまい、私の顔
からも笑顔も零れてします。私に出来ることは夫の無事を祈る
ことと、夫が居ない間家を守ること位ですが、少しづつがんば
って行こうと思います。

それと帰ってきたら、貴方が好きな採れたての種モミから作
った白いご飯をたっぷり炊いて、氣長に家で待ってます。と夫
に伝えると、

「中々に出来た話の分かるアマじゃねえか。やっぱりテメエは
実にいい女だ、ヒヒヒ……。」

と喜んでくれました。やだもう、少しの間離れるだけじゃな
い、そんな事で褒めたり茶化さないでください、イジワルな人
なんだから……。

六月五日

夫が街に出稼ぎに出て三日後、ジュリさんと一緒に青年団の
ルーさんが来てくれました。何でも此処の所、

「さがれ！ 道を開けろ〜！」

「汚物は消毒だ〜！」

等といった物騒な叫び声と、掌から炎を放ち、野生の魔物や
動物を見境なく焼き殺しながら山を歩く大男が、オーセイユ街
に向かっているそうです。ルーさんとジュリさんは、何故かし
きりに夫の事について聞いてきましたが、私の夫がそんな恐ろ
しい真似をするとは思えません。

確かに言葉使いは悪いですが、暴力的では決してありません
し、何より夫は優しい方ですので、きっと人違いだと思いま
なのでルーさん達には

「間違いなく人違いです」

とキツパリ伝える事にしました。ルーさん達はまだ怪しんで
いたようですが、しぶしぶ納得したのかゆっくりした足並みで
玄関から出ていきました。

それにしても、最近は何物騒な世の中になってきた気がします。
最近ではこの辺りに住んでいる貴重な動物達が消えてしまっ
たとちらほら話題になります。

そして夫も今頃、その火を撒く不審者が現れた辺りを歩いて
オーセイユ街へ向かっている筈です。遭遇してはいないか、巻
き込まれてケガ等していないかとても不安になります、大丈夫
でしょうか……。

今日の夜は、結局夫が心配で中々寝付く事が出来ませんでし
た。

六月十四日

行商の為オーセイユ街に向かった夫から久々の手紙です！

何でも持って行った売り物が飛ぶように売れ、多くの収入が来たとの事。中でも一番の売れ筋はユニコーンだそうで、ユニコーンの素材は希少且つ高値で売れるので一番収益がいいとの事。他にも多くの商品が売れてる等、オーセイユ街の報告を聞く限り、向こうでも元気に活躍していて安心します。今度手紙を送る際にはどんなやり方で売ってるのか聞いて見るのもいいかもしれません。

そういうえば今朝の新聞で、オーセイユ街近辺に、巨漢の不審者がいるそうです。何でも

「ヒヤッハー！ 此処の道を通す訳にはいかねえなあ、通りたきや此処にある物全部買っていきやがれ！ 食糧がある方が余裕を持ってオーセイユ返着けるってもんよ！」

とか、

「ここらには凶悪な不審者や山賊が多いからな、特別に格安料金でそいつ等からテメエを守ってやろうじゃねえか。有り難く思うんだなあ。何い？ そんなのは要らん、そもそもお前が山賊じゃないかだとおい！ 人の親切を無碍にしゃがむふざけた事を抜かす野郎だ、なら前払いにテメエに道中で襲われる恐怖でもたっぷり叩き込んでやろうかあ〜！」

等と恐ろしい事を行っているとか。生憎怪我人等は出ていないらしいのが不幸中の幸いだと思います。不審者は夫は見た目が似ているかもしれないので、犯人にされないか少し心配になりそうです。

今私に出来ることは、夫が巻き込まれたりしませんように祈るしかありません。

また元気な姿で逢いに来てくれますように……。

十二月十七日

夫がにかけて早半月となってきました。最近の話では、仕入れて来た商品がそろそろ切れはじめた事、そしてこっちの生活に必要ななりそうなものを買えるだけ買ったのでそろそろここに戻るらしいです。

つまり半年間待ちに待った、夫と逢える日がやってきたのです！

遂に待った約半月ぶりの夫の帰宅の喜びを隣のジュリの家に伝えに行きました、それを聞いたジュリは、何故かポカンとした顔の後、深刻そうな表情になってしまい、この後用事があるとか何とかと言われ、そのまま私は追い出されてしまいました。さっきまで暇そうだったのに不思議です。

後ろのジュリの家からは何かジュリと主人のアランが大聞く騒ぎ立てる音が聞こえてきます。そんなに大事な用を忘れる

なんて余程忙しかったのでしょうか。

そろそろ帰ってくるという事は帰ってくるまで恐らく一週間ばかりかかると思うので、それまでに沢山のご飯を作らなければなりません。

夫は大食漢なので少し大変ですががんばって沢山料理を作る用意をしないといけません。まずは近くに住むお爺さんから種モミを譲ってもらおうよう、話に行こうと思います。明日から早く起きないといけません。朝から大変になると思いますが、それでも夫が帰ってきて喜ぶ姿を思い浮かべると、心から楽しいなと感じます。

そろそろ寝た方がいい時間になってきました、朝は早くなりそうですので、早めに寝ないと。

十二月二十四日

今朝の新聞にオーセイユ街の方で強盗が現れたというニュースが書いてありました。何でもオーセイユ街の大きな富豪様の家や商店に敵つい恰好の大男が押し入り、高い食料品を奪い取ってしまったとか。不思議な事に金目のものは一切手を付けた素振りをせず、逆にもっと食糧を寄越せと被害者の人達に話したそうです。

顔は不明ですが、証言によると何処か産まれてくる世界が間違っているような、そんな雄叫びを発していたとか。こ

の辺りも最近は物騒になってきた気がします。夫は大丈夫なのか夜な夜な不安です。

十二月二十五日

遂に夫が帰ってきました！

半年ぶりの帰宅です！

雪の降る夜の道を通ってオーセイユの街から帰って来た夫は、背中にどっさり荷物と荷物を運んできてくれており、今回の商売はとても儲かったという事が一目で解りました。

もうすぐ年越しというだけあって荷物のお土産内には、長期保存できる食べ物や私が見た事も無いような豪華な食材がたくさん入ってました。私はこんなに何処で手に入れたのかと聞いてみましたが、

「ギャハハハハ、お前には教える訳がねえだろう！ 例え教えても全て理解出来る訳ねえのさ。聞くだけ全くの無駄ってものだ。そんなことより、お前は黙って早く俺様に手作り料理を差し出して貰おうか。まさか、忘れてしまったとは言うまいな？」

とはぐらかされてしまいました。きっと働き疲れ、歩き疲れてお腹が減っているんでしょう。さっき作っておいたご飯を出してあげないといけません。

喜んでくれるといいなあ。そう夫の食べる姿を思い浮かべる

と、笑いが漏れて仕方ありません。

今日の夕飯は夫が持って帰ってきてくれたお土産の食材と、近所のお爺さんから何とか譲って貰ってきた、お爺さんの家の最後の種モミから作られたお米を炊いた、真っ白なご飯の盛り合わせです。お貴族様達が食べるような沢山の料理の盛り合わせは出来ませんが、今までの生活の中では一番豪華な食事でした。中でも夫が気に入ってくれたのは真っ白なご飯で、夫曰く「しょぼくれたジジイから手に入れた最後の種モミで出来たメシを盛大に食べるのは、この世で最高の美味だとは思わねえか！ なあ！」

と言って勢いよく食べてくれた事から、今回のごちそうは夫の口にとってもあっていた様です。その結果に内心安堵しつつ、私達は雪の降る夜を笑いながらすごしました。



「お、そんな古臭え本なんか引つ張り出しやがって、何読んでんだあ？」

夜、空に満月が昇り世界を照らす月光の光の中、仄かに燃える蝋燭の灯りを一身に受ける妻マゼンダの姿を見かけた夫ジ

ルドは、荒々しい声で後ろから話しかけた。そんな夫の声に反応し、マゼンダは苦笑しながら答えた。

「掃除しようとして押入れ整理してたらね、見つけたのよ。私達の新婚時代の、にっ・っ・き」

それを聞いたジルドは、さっきまでのぼけっとした表情を一変させて、人が変わったかのように慌てだした。

「新婚時代の日記だア!? あんな小っ恥ずかしいモン引つ張り出しやがったのかこのアマあ！ とつとと仕舞っちゃまえそんなモン！」

一気に酷く怒鳴りつけるようなジルドの口調と声色は、心臓の弱い人間なら一瞬で気絶しかねない声だったが、マゼンダは全く動じない。それどころか笑顔を消すことなく何も表情が笑みから何も変わる事は無い。

「そんな恥ずかしがらないでもいいじゃないの。ホラ、私が妊娠してるって分かった日の貴方の喜びようといったら……。」

「だーっ！ そんな情けねえこと思い出させるんじゃないやねえー！」

顔を真っ赤にさせて怒り出したジルドだったが、その顔は怒るといふよりも照れ隠しに近かった。そんな些細な違いを感じ取ったマゼンダは、より一層笑みを深くしていく。そしてそれを見たジルドは更に顔を赤くしていく。

その様子はぐるぐると同じ滑車を廻し続けるネズミを思い

「浮かばせる、所謂堂々巡りというものだろう。だがそんな微笑ましくも不毛な堂々巡りな夫婦喧嘩を、唯一遮るものがあつた。」「ん、んん……、お、おとお、おぎやあああああ！ おぎやあああああ！」

仲睦まじい夫婦喧嘩に眼を醒ましたのか、マゼンダの横のベットからうつつら金色の髪を生やした赤ん坊の、甲高い鳴き声が響く。それに気が付いた二人は互いにポカンとした顔を見合わせ、軽く苦笑した。

「……けっ、俺様達の喧嘩なんて、ガキにとっちゃ耳障りなだけかい」

そう嘯いたジルドはイラついたような口調であったが、何処かさっぱりとした様子だった。そしてその気持ちは、妻であるマゼンダも同じようだった、

「うふふ、そうねえ。大人の口論なんて子供には不快な物だもの、そろそろ止めに行きましょうか」

ねえシルヴィア？ と泣き止み再び眠りについた赤ん坊に、マゼンダはあやす様に語りかけた。

「違げえねえや、ヒヒヒヒ。ならそろそろ俺様も寝るとするか」
そうジルドはマゼンダに話しかける。

「そうねえ。明日も早いし、ちようどいいかもしれないねえ」
そう答え夫婦二人は赤ん坊のシルヴィアと共に眠りについた。
真つ暗になった部屋の中、家族三人でベットに潜り込んだ後

妻の方を向いたジルドは、ふと何かに気が付いた。

「おい、おめえ何持ってんだ？」

ひっそりシルヴィアを起こさない様話しかけてくるジルドに、マゼンダはうつつら優しい笑みを浮かべこう答えた。

「私が書いた家族の日記よ。私とシルヴィア、それと貴方の事を書いた、ね。」

「……けっ、俺の事なんて好き好んで日記にする様な女聞いた事ねえよ。」

はぶてた様にぶつきらぼうに答えたジルドに、マゼンダはくすくす笑う。

「あら、居るじゃない。今貴方の横にね」

「……ちっ」

そう答えてジルドは妻から顔を背けた。その後部屋は静寂に包まれ、そこにはうつつら寝息を立てる三人の家族だけが居る。そして三人の仲睦まじい家族を照らす満月の空には、ほうほうと、ひっそり静かに啼く梟の声だけが物静かに響いていた。

完

ゝあとがきという名の反省会ゝ

「ですが笑えますねえ、今回の作品、本来は一人世界観から浮き過ぎた主人公を書くギャグ作品の予定だったというのに。」

しかし完成したのは普通にほのぼのとした、新婚夫婦の惚気満載の単なるいちやいちゃストーリー。病みも無ければ、希望と奪い取り絶望を与えるファンサービスすらも無い唯のラブコメ小説。随分と差が付きましたあ。悔しいでしょうねえ」

(自虐)

どうも、これで通算五作品目となりますBARUNGAと申します。

以外に難産でした。好物とはいえ山なし落ちなしの話は初めてかも……と思ったら基本そういうストーリーが多いですね、自分の作品。

今回は主に

「某世紀末救世主伝説の雑魚みたいなキャラを書きたかった」この一言に尽きます。しかしこういう世紀末キャラを動かすのは意外に大変でした。基本明らかな出オチである一発キャラな訳ですから、数回書いただけでネタが枯渇するという有様。最初のあとがきの冒頭が全てを物語っています。結局ラストを

むりやり方向転換させた結果がこの様です。(私自身が)悔しいでしょうねえ。

まあ一通り綺麗に終わったように見えるので何も問題はありません。

ジルドが妻の居ない所で何をしていたか？ 唯の行商や狩りです。それ以外の何があると言うんですか。彼は家族思いのいい働き者ですよ、見ればわかるじゃないですか。ハハッ！

次回こそ……次回こそ書くん、念入りのファンサービスを施した主人公を……。青いお髭の芸術家な旦那やファンサービスの4番目の人、白い孵卵器のマスコットに見せても問題ないような純愛に満ちた恋愛小説を……。

背徳と禁忌の愛……、その為には真の恐怖とは変化の動態、希望が絶望に切り替わるその瞬間、それを描かねばならぬ……。希望を与えてそれをしっかりと奪い取って差し上げる親切丁寧な主人公へのヒロインからのファンサービス……、誰かが誰かに深い愛情を与えれば、等価交換として他者の同等以上の幸せを生贄にせねばならぬ……。

課題は山積み。描写も山積み。愛とは、愛とは一体……：グギギギ。

個人的に、興奮もとい納得出来そうな純愛というものは未だ模索中ではありますが、次の作品を作るまでには……：ミツケラレルトイイナー(願望)。

まだまだ色々稚拙な文ではありますが、今回の小説を読んでもうくださりありがとうございます。また次の機会でお会いしましょう。

文芸研究会二回生BARUNGA